

春の褒章 自然科学系「紫綬」

政府は、春の褒章を発表した。文部科学省関係では、紫綬褒章23人、藍綬褒章5人、黄綬褒章11人、緑綬褒章(褒状)1団体が選ばれた。紫綬褒章では、学術分野で7人、発明改良で1人が選ばれ、自然科学系の研究・開発実績が高く評価された。伝達式は5月16日、如水会館で開催される。学術及び発明改良の紫綬褒章受章者は次の通り。敬称略。

学術

◇齊藤誠(53歳)一橋大学教授—マクロ経済学の分野において、特に資産価格と消費の決定を証明するため、異質経済主体モデルに基づく理論を開発し、マイクロデータによる実証的研究を展開するとともに、自然災害リスクの実証研究へも応用して優れた業績をあげ、斯学の発展に貢献した。

◇小林俊行(51歳)東京大学教授—数学の分野において、リーマン幾何学の枠組みを超えた均質空間における不連続群の理論、無限次元における対称性の破れを代数的に記述す

る理論、可視的作用の概念による無重複表現の統一理論など、代数、幾何、解析にまたがる理論を創始、数学研究に新しい領域を生み出す優れた業績をあげた。

◇藤田誠(56歳)東京大学教授—有機化学・錯体化学の分野において、金属イオンと有機分子との間に働く配位結合を駆動力とする自己組織化の優位性に着目することにより、ナノサイズの様々な形状を持った分子を巧みに作り出せる仕組みを見出し、3次元構造体を精密に構築・応用する手法を世界に先駆けて確立する創造的、先導的な業績をあげ、物質創成を担う研究に多大な貢献をした。

数学の小林氏、有機化学の関口氏ら

◇関口章(62歳)筑波大学教授—有機化学の分野において、構造有機化学的手法により、ケイ素やゲルマニウムなどの高周期14族元素化学を中心とした低配位及び多重結合化合物を創製するとともに、その特異な構造、物性、新しい反応を発見し、特に世界ではじめてケイ素三重結合化合物の合成を果たすなどの優れた業績をあげた。

◇坂野仁(66歳)東京大学名誉教授—神経科学、特に高等動物の嗅覚研究において、分子生物学的手法を用いて、匂い情報を受容・識別するための神経回路の形成に関する分子機構を解明するとともに、嗅覚情報と行動との関係を明らかにするなど優れた業績をあげた。

◇濱田博司(63歳)大阪大学教授—発生生物学の分野において、特に哺乳動物(マウス)の胚発生の研究で、体の左右非対称性を発現する遺伝子を発見し、遺伝学、細胞生物学的手法を用いて左右決定に関係する機構を明らかにするとともに、人工

的な水流を用いた実験方法を開発して胚に発生する繊毛の機能を証明するなど、哺乳動物の体の左右非対称性の仕組みの解明に優れた業績をあげた。

◇伏木亨(61歳)京都大学教授—栄養化学の分野において、独創的な視点と方法論を駆使して食に関する革新的な研究を推し進め、食研究の科学的基盤を一新する新しい物質や理論を発見し、消化酵素の分泌メカニズムや油脂・出汁のおいしさを解明するなど、食研究の発展に優れた業績をあげた。

発明改良

◇佐藤健一(60歳)名古屋大学教授—映像・情報・音声など多様で大容量信号を効率的に伝送するため、バーチャルパス概念を取り入れた非同同期伝送モード及び光の波長により通信路を識別するフォトニックトランスポートネットワーク構成技術を開発・国際標準化し、これにより大容量高速通信を実現するシステムとして世界で広く利用され、ブロードバンドマルチメディア通信の発展に大きく貢献した。